

# GHQ／SCAP占領下の大田洋子

岩 崎 文 人

1

大田洋子ほど文壇からも出身地（広島）からも嫌われた作家もまためずらしい。

たとえば、次に上げるのは平林たい子の文章である。（注）

次第に、原子爆弾の害悪を世間が声高にいうようになってから、彼女は「人間檻樓」という小説をかいた。この小説がその年の女流文学賞の候補に上った。

上京してから、どこに住んでいたかもわからなかった彼女からこの時不意に猛烈な働きかけがきたにはおどろいた。速達がき、電報がき、また速達が来、彼女がたずねてくる。

私は彼女の日常生活振りはいつも笑って見ていたが、彼女の芯にある文学魂は尊敬していたから、彼女の依頼に応じて、あ

ちこちに電話をかけたなり、会って頼んだりした。結局吉屋さんと二人でその年の賞を領けることになったが、あまり烈しい運動振りを非難する人もあった。

この賞の授与式には彼女は欠席した。病気であったのかも知れないけれども、すでに決ったからもう行く必要ないといった気持が想像出来て、私は愉快ではなかった。その時は私も病気のため欠席していたが。

某新聞社が、吉屋信子さんの受賞の祝福のため贈った何かを半分わけてくれと、使いが吉屋家に行ったときには、いつものようにただ笑っただけではすまされない後味が残った。

この交友録「大田洋子さんと私」は「大田洋子さんとは随分古い知合いである。」という一文から始められるが、ふたりが出会うきっかけとなったのは、長谷川時雨が昭和三年七月に創刊した後期

『女人芸術』を通じてである。ちなみに、創刊号に平林たい子は短編「生活」を載せており、大田洋子は、翌四年の六月、文壇第一作の「聖母のゐる黄昏」を同誌に発表している。また、昭和七年四月には、読売新聞紙上で、大田洋子・平林たい子・吉屋信子・岡田禎子・矢田津世子・真杉静枝の六人が「女流作家座談会」を開いている。引用にある「人間檻樓」は、昭和二六年八月、河出書房から刊行されたもので、吉屋信子の「鬼火」とともに第四回女流文学賞を受賞したものである。

「大田洋子さんと私」は、基本的には、大田洋子の優れた「芸術家としての素質」、「理性的な」側面、「凛々し」さ等々を浮き上がらせようとしたものではあるが、逸話として語られているそれぞれは、いずれも大田洋子の「現実に対する非妥協」的な、いわば傲慢で偏狭な性格を読者に印象づけずにはおかない。

がしかし、ここで大田洋子の作家としてのネガティブな像とその内実について云々するつもりは、わたしにはない。ただ、大田洋子の文学的評価にこうした作家像のいくらかが影響しているとすれば、それは、やはり問題にしなければならないだろう。

大田洋子の唯一の本格的評伝、研究書でもある江刺昭子の『草篋評伝大田洋子』の一節に次のようなものがある。

広島には、終戦直後から続くいくつもの同人雑誌形態をとった

文芸雑誌があつて、広島文化の母胎になっていた。当然これらの雑誌は、原爆をテーマにした作品を掲載していたが、これらの雑誌で洋子に原稿の注文をするにもべもなく断ってきたという。一方洋子は、小説をはじめ随筆などの形で中央の雑誌に断なく原爆のことを書き続けた。原民喜が今ほどには評価されず、峠三吉の活動は広島島の土地を母胎にしたものであったからそれほど全国的には知られておらず、従つて、洋子一人が原爆作家のように騒がれたのである。原爆の悲惨を一人で背負つて立つてるようにマスコミから騒がれた洋子に対して広島の人々は反発した。一種のやっかみだったのだから、原爆を売りものにして名を得た」ということになった。偏狭といえなければ地方文壇人の感情的な反発だったといえるだろう。

大田洋子は広島で出されていた雑誌からの原稿依頼を「にべもなく断つた」というが、それは事実なのか。たしかに、今日見ることできるもつとも詳しい大田洋子の年譜、浦西和彦編の「大田洋子年譜」等を見るかぎり、大田洋子が地元誌に寄稿したのは、わずかに一誌にすぎない。江刺昭子の文章、それに大田洋子年譜を重ね合わせて浮かんでくるのは、やはり、大田洋子の傲慢で非妥協的な、中央志向の文学者の像である。が、それは事実なのであろうか。

戦後間もなく広島で創刊された雑誌は、ゴードン・W・プランゲ

文庫広島県雑誌の部で確認できる範囲で示すと四八一誌（このうち昭和二十一年に創刊されたものは六三誌）にのぼる。プランゲ文庫は、周知のとおり、GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の発出したプレスコードに基づきCCCD（Civil Censorship Detachment/民間検閲支隊）が昭和二十年九月から二十四年一〇月まで行った検閲資料である。大田洋子が被爆後再上京するのは、昭和二十二年九月頃であるので、大田洋子が地元広島に疎開していた期間とそれは重なる。大田洋子は、実際のところ、地元誌に対して言われているように、冷淡であったのか。大田洋子が戦後広島に滞在した二二年九月までの作家的動向は、浦西和彦編の年譜によれば次のようである。

昭和20年（1945年）四十二歳（※印は未確認を示す。）

1月20日 戦ふ女性※ 文学報国 44号

2月1日 白雁 新青年 26巻2号48〜56頁

8月30日 海底のやうな光―原子爆弾の空襲に遭つて―

朝日新聞

昭和21年（1946年）四十三歳

4月〜7月 青春の頁※ 新 椿

5月29日・6月1日 緑の谷間にて（二）（二）

万朝報

7月1日 仮睡（前編）―ある混血児の手帖―

婦人画報 503号38〜42頁

8月1日 仮睡（後編） 婦人画報 504号54〜57頁

昭和22年（1947年）四十四歳

5月1日 六如抄―ある手記の内―

新小説 2巻2号20〜41頁

8月1日 高啼くひと 婦人文庫 2巻8号44〜54頁

右に記した年譜にある「青春の頁」が大田洋子が地元誌に協力した唯一の作品ということになる。

が、プランゲ文庫によれば、次に上げるような作品を確認することができる。

昭和21年（1946年）

7月1日 人間勉強について

瀬戸内海創刊号30〜33頁

3月25日 長編小説 青春の頁（一回）

女櫛 新椿創刊特集号

6月1日 長編小説 青春の頁（二回）

深沢ゆりえ 新椿第一巻第二号48〜55頁

7月1日 長編小説 青春の頁（3）

ふたつの手紙 新椿第三号 38～44頁

8月1日 長編 青春の頁 4 新椿第四号 50～56頁

閉ざされた青春

9月1日 生活、恋愛、文学を語る

畑耕一・大田洋子対談会

郷友九月号 20～32頁

12月1日 青春の頁第五回 新椿第五号 52～57頁

深沢烈と七穂子

昭和22年（1947年）

1月1日 青春の頁（第六回） 新椿第2巻第1号 50～57頁

鹿

3月1日 青春の頁（最終回） 新椿第2巻第2号 34～39頁

大田洋子は、尾道市の浜根汽船株式会社出版部が刊行した『瀬戸内海』、佐伯郡観音村（現・広島市。のち祇園、横川へと移る）の新建設社（のち新椿社）の『新椿』それぞれの創刊号に原稿を寄せ、広島市の株式会社郷友社から出ていた『郷友』では、畑耕一との長時間にわたる対談をこなしている。ちなみに、創刊号『新椿』のあとがきである「編輯室」は、次のように記している。

新建設者が女性の生活と教養の為に月刊雑誌『新椿』を発刊

することになりましたのは、今、雨後の筍の如くに出てゐる世間の雑誌刊行の流行に追随する為では決してありません。あらゆる方面に於て、『地方対中央』の権勢の差異を今迄私達は余りにも切実に見せつけられて来ました。文化的方面に於て特にその傾向は甚ちぢるしく感じられて来ました。幾多の人々幾多の団体に依つて幾度試みられ企てられたことでしょうか。然し其の殆んどは中央に集権された営利的既成勢力の前に無惨にも倒れてしまひました。私達は地方文化向上の為に、今迄にない新しい力を生み出さなくてはなりません。そして従来中央から地方へと流れ受けて来たものに対して反対に、地方から中央へと何か謝礼しなくてはならないのです。幸に郷土より細田民樹、畑耕一、大田洋子各氏の執筆を得たことは何等かの暗示ではないでしょうか。特に畑耕一氏は生れ出る赤子の産婆役として一方ならぬ御援助を得ましたことを誌上を借りて読者の皆様と共に感謝しておく次第です。

これらが帰納するのは、広島で被爆し、再上京するまでの期間にかぎれば、地元誌に対して非協力的であった、という風説とは異なるものである。

この『新椿』に連載された「青春の頁」に対する言説がまた、大田洋子という作家をなつかげめる大きな一因となった。たとえばこうである。

この作品（注・「桜の国」）ともう一つ、敗戦直後の広島で創刊された婦人雑誌『新椿』に掲載した「青春の頁」が、しばしば洋子の原爆文学の価値を半減するかの如く語られる。二十一年の四月から七月まで『新椿』に載った作品を私は見ていないが、やはり原爆とは関係のない青春恋愛小説だったらしい。この作品は、「編集者と作者大田洋子の間にトラブルがあつて途中で休載になった」（『中国新聞「戦後広島文芸史」』）といういわくつきのもの。

洋子を非難する人々の意見によれば、「『屍の街』ほどの意識の高い作品を書きながらほぼ同じ時期に、そんなくだらないものを書いたのは洋子の姿勢があいまいだったから」ということになるのだが、そう言い切るのも酷な気がする。むしろ、戦後の価値の変動の中で、昔日の夢を追い、右往左往していた洋子の姿がうかがわれて、哀れに思える。「書きのこしておかないればならない」という使命感で「屍の街」を書きあげたもの

の、原爆を口にすることがタブーで、発表することができないとなれば、なにかを書いて生計をたてていかなければならないことになる。いきおい手慣れた傾向のものに手を染めたのもうなづける。（傍点原文のまま）

先上げた江刺昭子『草鑑 評伝大田洋子』中の文章である。江刺昭子は同著の別な箇所でも次のようにも書いている。

大牟田氏におめにかかったあと、私は二、三のいわゆる広島文化人グループの人々に接した。果して私は、洋子から気持のよくない仕打ちをうけたことから来る明らさまな反発の色をみた。洋子が残した悪印象の数々を語るには、既に長い年月が流れて、今更それを語るのには大人気ないと思うのか具体的にそことは何も聞けなかったが、その反発は微妙に洋子の文学の評価に反映していた。同じ原爆を描いた作家の中でも、原民喜の純情と清潔な悲劇を悲しむほどには惜しまれず、峠三吉の怒りの文学の系譜を受け継いで平和運動を実践している人々が峠を評価するほどに、洋子の文学は評価されていない。むしろ、「屍の街」を書いたと同じ時期に「青春の頁」のような作品を書いたことや、晩年を原爆文学ひとすじに貫かなかつたことに対する非難の声が大きい。

まず、「青春の頁」が「編集者と作者大田洋子の間にトラブルがあつて途中で休載になつた」というのは事実なのか。先に示したように、大田洋子は、『新椿』創刊号から一度の休載もなく最終回に当たる第七回まで連載している。これはまぎれもない事実である。最終回の「青春の頁」にはその回の小タイトルは付されていないものの、『新椿』創刊号に掲載された回には「女櫛」、以下第六回まで、「深沢ゆりえ」、「二つの手紙」、「閉ざされた青春」、「鹿」とそれぞれ小タイトルのもとに書き続けられている。繰り返すが一度の休載もない。最終回も書かれている。

「青春の頁」は次のようにはじまる。

暗くて窓の外は見えなかつたけれど、列車がふるさとへ近づいたといふことだけで、日高七穂子の顔に、生々と美しい血がのほつた。

走る汽車の中で、たつた一人、年の暮を見送ることも、珍らしくて、愉しかつた。日高葉穂子は時計を巻いた白い腕を、眼の前に曲げて覗き込んだ。こつこつと針のすすむ音がして、十二時をすぎやうとしてある。苦しくて長かつた戦争の昭和十九年が終わつたのだ。

「ずい分この汽車おくれたんだね。十二時十四分には、広島へ着いてなくちやならないのにねえ」

「まだ岡山を出たばかりよ」

七穂子のうしろの席から、そんな風に話してゐる夫婦らしい人の声がきこえた。

「この汽車、呉まではですね。三原で降りて、すぐあとにくる博多ゆきに乗るかへますと、二時間も早いんだそうですよ。さうなさいませんか？」

七穂子の前にかけてゐて、時々話しかけた婦人が、七穂子に云つた。

女子医専を卒業し四谷にある総合病院に勤務する内科医日高葉穂子は、昭和二〇年を、婚約者原瓏一がいる故郷広島に向かう呉線經由の列車の中で迎える。七穂子の父も医師であり、渋谷で開業していたが、空襲に明け暮れる東京から七穂子を祖父母のいる牛田に疎開させたのである。瓏一は広島文理科大学で独文学を専攻する助教授であつた。

七穂子は瓏一の世話で彼の友人深沢が外科医として勤務する宇品の佐久良病院に勤めることになる。瓏一との生活を夢見た七穂子ではあるが、瓏一は深沢の妹ゆりえと深い仲になっていた。そうしたこともあり、七穂子は次第に深沢に惹かれていく。そんなおり、七穂子のもとに、東京から母が病氣であるとの電報が届く。

「青春の頁」最終回、七穂子がふたたび広島に帰ってくる列車は、

冒頭の一節に呼応するかのようには、八時四〇分広島着の呉線まわりのそれであつた。しかも、その日は、昭和二〇年八月六日の列車であつた。

「途中で休載になつた」、「原爆とは関係ない」「くだらない」「青春恋愛小説」の実質は次のようなものである。

七穂子が呉市の焼野原に、眼を注いで暗澹とした感慨に陥つてゐたとき、広島市は前代未聞の空襲のため、さかんな火の柱を街々の空に突きあげ燃え亡びてゐたのだつた。

乗客たちは、総立ちになつてひしめき、構内を埋めて蒼白になつた。群衆に交つて佇んだ七穂子の胸に、まつたく反射的に、突きぬけて通つた最初の人の顔は朧一であつた。どこからともなく、刻々に耳へ這入つてくる広島市の情報は、そこに住む人々を根こそぎ死へ誘つたかと思はれた。深沢の愛をよるこびを持つて受け入れた今となつても、なほ誰より先きに朧一の安否を想ふ自分を七穂子はふしぎに思つた。

これが日高菜穂子の迎えた八時一五分である。原朧一と深沢烈が迎えたそれは次のようなものであつた。長文になるが、いままでも誤解されたままで知られていなかつたものでもあるのでそのまま引用する。

平生の通りだつたら、爆撃の中心地ちかく、市電で走つてゐる時刻であつた。深沢は燃える街をいくどか遠廻りで、地獄かと思へる壊滅の全市に耐え難い想ひを抱きながら、病院へ行つた。入り口の部厚な硝の二枚扉もばつたり倒れ、その下敷になつて呻いてゐる若い看護婦の頬が破れて、血の点がもはやみみずのやうに、かたまつてゐた。

負傷者は、あとからあとからと詰めかけ、長い廊下までうめつくしたその人々の間を血の匂ひが流れてゐた。

夕方であつた。街々はまだ燃えてゐた。火災を喰ひとめた作久良病院の、骨組みだけになつた建物の二階まで深沢が順々に怪我人たちの手当をしながら上つて行つたとき、

「深沢かい？」

と誰かが声をかけた。聞き馴れた声のやうにも深沢は思つたけれども、誰がどこで呼んだのか、見当がつかなかつた。

「僕だ。ここにゐるのだよ」

二度目の同じ声で、深沢ははつとした。原朧一！ああ、だつたら声が変わつてゐる。

廊下の片隅、高い窓もこはれた下に、灰いろの襦袢がうづくまつたやうな恰好で、一人の青年が仰向けに、のびのびと寝てゐた。

深沢は近づいて、その青年のからだに掩ひかぶさるやうに

し、顔を覗き込んだ。

「原か？」

さう念を押さなければ判らないくらいひ、瓏一の面ざしは変り果ててゐた。光線の火傷のために眼まで腫れつづけた顔は、無気味な蒼ぐろい色を塗つたやうであつた。光線は全身を焼いてゐた。

「どこにゐたのだね」

深沢はすぐ聴診機を胸にあてて訊いた。心臓はすっかり弱つてゐる。

「八時に家を出て八丁堀まで電車で行つてゐたんだよ。広島駅へ行かうと思つてね」

「駅へ？」

「さうだ。七穂子に最後のわかれをするために。僕は電車ごとやられた。電車はテンビのやうに焼け焦げたよ。僕は入口に立つて、外へころがり落ちてね、倒れてゐた。そのときはこんなにすつかり僕の中から焼けてゐたんだね」

「どうしてここまで来られたのかしら」

深沢は瓏一の手をしつかり握つて、やさしく云ひかけた。

「僕がむしやらに火をくぐつて、ここまで歩いて来たんだよ。君の治療を受けたと思つたものだからね」

「なんにしてもひどくやられたものだ。でも死ぬんぢやない

よ。僕は君を死なせない」

深沢の眼は充血して来た。

「ゆりえさんは？ 生きてゐるだらうか」

「わからない。多分生きてゐるだらう。だから君も生きなくてはならないよ」

「僕はもうなんにも要らない。水をくれ給へ。いまは水だけがほしい」

火傷の患者の誰でもが、口をそろへて、水、水と叫んでゐた。深沢はその人たちに、水をのませない方針をとつてゐたけれども、瓏一の容態がすでに最悪への道を辿つてゐることを知つて、水を取りに行かうとした。

深沢が死を控えた瓏一の中から離れて立つたとき、もう夜が来てゐた。

「先生。あたくし——」

深沢が振り向くやいなや、これも疲れ切つて頬の落ちた七穂子が、崩れるやうに深沢の硬い胸にぶつかつて来た。

「よく帰つてきてくれた。ありがたう」

思はず肩を引き寄せて、囁くやうに深沢は云つた。亡霊のやうに倒れてゐる瓏一を七穂子は深沢の肩ごしに見た。

七穂子はそれが誰であるかを気づかなかつた。

「菜穂子さん、原が来てますよ。あなた診ておやんなさいね」



深沢は七穂子の手に聴診機を渡した。そして後からそのからだを掴むやうにし、瓏一の傍へしやがませた。

街から街の死体のなかを通り抜けて来た菜穂子の眼に、瓏一の死に瀕した姿が、黒々と悲惨に写った。この世の出来ごととは思へなかつた。烈しい衝動をうけた人が、すぐにはそれを感じることが出来ないやうに、七穂子はうつろであつた。

黙つて瓏一の黒い髪の毛を、そつと撫で、自分の頬を、相手の頬に寄せた。涙が止め度なく流れた。瓏一は七穂子の手を握つて離さなかつた。

深沢は□（注・一字判読不能）の上に両手を組んで、じつと二人の様子を見下してゐた。

瓏一は翌七日の夜明けに亡くなる。建物疎開の勤勞奉仕に出ていたゆりえは、市内の収容所でも似ノ島の収容所でも見出せなかつた。この小説は、一度の休載もなく、原爆を最終回で描き、深沢と七穂子が広島市郊外の祇園で新しい生活を始めようと決意する場面で、全七回の連載を終える。

### 3

にもかかわらず、「青春の頁」が「途中で休載になった」、「原爆とは関係ない」「くだらない」「青春恋愛小説」といった刻印を押さ

れたのはなぜか。それは、「青春の頁」が、CCDによつて検閲が行われていた期間に発表された作品であつたからである。

検閲は、GHQ/SCAPが昭和二〇年九月一九日に発出した「〇カ条のプレスコード（「日本新聞週則へ日本出版法・Press Code for Japan」）に基づいて行われたが、占領下の検閲の実態は極力秘匿されていたのである。CCDに配布された「雑誌及び定期刊行物ノ事前検閲ニ関スル手続」の第九条には、「訂正ハ常ニ必ず製作ノ組直シヲ以テナスベク、絶対ニ削除箇所ラインキニテ抹消シ、余白トシテノコシ、或ハソノ他ノ方法ヲ以テナスベカラズ。尚、ゲラ刷ヲ提出セル後ハ、当検閲部ノ承認ナキ追加又ハ変更ヲナスコトヲ得ズ」とあり、この条を補うものとして出版社に配布された注意書第一条には「削除を指令されたる場合は左の如き行為をせず必ず組み変え印刷すること 1、墨にて塗りつぶすこと 2、白紙をはること 3、〇〇等にて埋めること 4、白くブランクにすること 5、頁を破り取ること」とあり、第六条には「ゲラ刷の＝〇〇×等の記号は出来得る範囲でこれを避けもし止むを得ず使用する場合には必ず真の意味する『仮名』又は『漢字』をもつて書き込むこと」とある。このように、検閲の実態は最初からその痕跡を隠し、秘匿されるようはかられていたのである。

昭和二二年三月に創刊された『新椿』がCCDの指摘を受けた最初のものは同年の七月号に掲載された「働く婦人と明日の政治」（森

戸辰男へのインタビュー)であり、つづいて翌二二年一月号の根津菊治郎「一九四七年の展望」が指摘をうけている。両者に関しては福岡市橋口町にあった第三地区検閲局(検閲官歩兵大尉ジョージ・P・ソロブスコイ)から発行人本山登一郎に当たった CENSORSHIP DOCUMENTS が残されている。

ところで、大田洋子の「青春の頁」最終回が載った、二二年三月に刊行された二・三月合併号(第二巻第二号)であるが、この号は、それまでの号と異なり、実に多くの指摘を受け、表紙には *re-exam* とある。指摘されたのは次のようなものである。

栗田治人「インフレと三月危機」

英文注記 SCAP, as to B29, British P.M., Anglo-U.S.

Comment on price policy of Soviet Union by AP,

一カ所判読不能、判読不能 of England, SCAP

兼綱悦雄「三月危機と農村」

英文注記 一カ所判読不能 SCAP, as to New land low, inf.

神近市子「危機に際しての婦人の態度」

英文注記 U.S.A

峠三吉「青年運動のゆく道」

英文注記 一カ所判読不能 occupation policy

綾瀬しげる

英文注記 as to air raid in Tokio

大田洋子「青春の頁」(最終回)

英文注記 A-bomb, disastrous scene by bomb

この号が最終的にどのような形で刊行されたのかは、プランゲ文庫にこの号の DOCUMENTS が残されていないこともあり、今のところ確認はできない。これほど多くの指摘を受けているので刊行されなかつた可能性もある。が、次号三・四月合併号が通し番号第二巻第三号となっており、あとがきにも特別の記載がないので、先ず刊行されたと考えてよい。

ちなみに、プランゲ文庫広島県雑誌四八一誌において、掲載予定の小説全文が CCD により指摘を受けた例は一例だけある。それは、昭和二一年五月に創刊された「郷友」の最初の号のゲラ刷り全頁にわたり文章全体に大きく×印のある宇野哲郎の小説「前後」であり、それ以外にこうした例はない。

とすれば、大田洋子の「青春の頁」は、原爆の事実、主要な原爆の悲惨な描写部分を削除のうえ、発表された可能性が高い。「青春の頁」は、こうした GHQ/SCAP 占領下といった特別の時代の特別の事情ゆえに誤解され、ついには、大田洋子の文学そのものを貶める証左ともなったのである。

大田洋子が、国策政策に乗り、昭和一三年八月、中央公論社の知識階級総動員懸賞小説に応募するために「海女」(14・1、創作第一

席当選)を執筆し、一四年二月には東京朝日新聞の懸賞小説「桜の国」(15・1、当選)を書き、一五年五月には、輝夕部隊の慰問使として、中国大陸に渡った、という事実は事実として、認めねばならない。また、昭和一六年一二月八日の太平洋戦争の開始に当たり、

当日の八日、米英に対して聖なる宣戦が布告されたのだった。

この開戦はびつくりしたり、驚愕の念を抱かせられたものではなく、かくあるべきことが鮮明に具体化されたのだった。八日は新聞やラジオにくつついてゆき、涙を流し、眼ざめるような思いがし、新鮮な焰を感じた。<sup>(注6)</sup>

と記した作家であることも間違いない。が、こうした戦前の事例をもとに「青春の頁」を推測することは避けねばならない。ましてや、作家大田洋子の人間像を重ねて読み解くといったことは控えねばならない。要は、作品と先入観なしに向き合うことである。

今後大田洋子の作品がさらに発掘され、大田洋子という作家がトータルな形で像を結ぶことを期待せずにはいられない。

注

注1 平林たい子「大田洋子さんと私」(『自伝的交友録・実感的作家論』昭和35・12、所収)

注2 江刺昭子『草籤 評伝大田洋子』(講書房、昭和46・8。大月書店版、

昭和56・7)

注3 『大田洋子集第四巻』所収、昭和57・10。復刻初版、平成13・11)

注4 大田洋子は、浦西和彦編年譜によれば、昭和二十七年二月に、アンケート「新しい文学運動及び新人に何を期待するか」を「エスポワール1号」に寄せられている。「エスポワール」はもと、広島で創刊されているが、これは、東京版であるので、地元誌というわけにはいかない。岩崎清一郎「広島の文学―ゆかりのある作家たち(六)―(戦後編)」「梶葉」終刊特別号、平成二十二年七月によれば「エスポワール」(広島版)も同月付で刊行されている、という。

注5 「青春の頁」最終回の最初の引用文に当たる箇所「A-bomb」と注記された指摘があり、次の引用文に「destrous scene by bomb」の注記と指摘がある。

注6 「暁は美しく―十二月八日の夜―」(『暁は美しく』赤塚書房、昭和18・3、所収)

本稿は、平成一九年度一二月二五日開催の広島大学国語国文学会において、同題で講演したものをもとにしている。また本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C)「課題番号17520116」「GHQ占領下時代のCCD(民間検閲支隊)による検閲に関する研究」の一部として成ったものである。時間的制約もあり、第一次調査の報告とするが、再度精査し、大田洋子の作品の確認をはじめとして、あらためて稿を起すつもりである。

— いわさき・ふみと、広島大学大学院教育学研究科教授 —